

セレンディピティと目に見えない世界との関係についての一考察

A discussion about the relationship between serendipity and spiritual world

大橋一仁

Kazuhiro OHASHI

1. はじめに

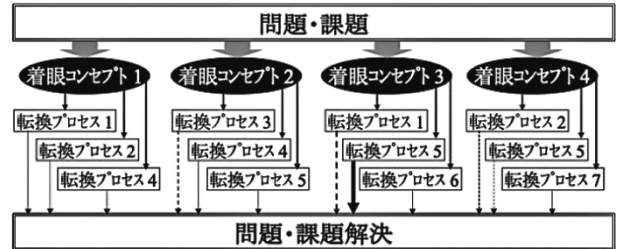
恥ずかしながら、私は森田昇先生のこの専門委員会の発足まで、セレンディピティの言葉すら知らなかった。インターネットで検索してみると、非常に多くのサイトが表示され、少し時代に取り残されている感じを覚えたが、これを正確に定義した日本語はなく、長い日本語の説明よりもセレンディピティの一言の浸透を納得した。

したがって、セレンディピティの意識がなかったため、関連するニュースを耳にしても、世の中には優秀な頭脳をもった人がいるものだから、素晴らしい発想ができる幸運な境遇にある人だとか思い羨んだりする程度であった。しかし、セレンディピティとして改めて考えると、大学内では発想に関する授業をしたり、研究においてもセレンディピティと思わしき体験があり、その一部を紹介する。また、セレンディピティは当事者に生じた結果を中心に説明されることが一般的と思われるが、その根源についても考察してみたい。

2. 発想教育

「君、もっと考えんとアカン！」私の研究室の前任の教授であった塚本真也先生(岡山大学名誉教授)が、研究指導でしばしば学生に叱咤激励していた言葉である。塚本先生は、平成 12 年から技術者、研究者の発想力の重要性を提唱され、当時珍しかった発想教育の授業を機械系のカリキュラムの中で立ち上げられた。その授業は現在でも続いており、学部では児玉紘幸講師、大学院では小職が担当している。

塚本先生が教授に昇任されればらくすると、この発想教育の授業担当のお鉢が回ってきた。それまで、発想には一目置いていたものの、自分に発想が次々と湧いて出るほどの才能もないまま、授業を引き受けた。この授業における発想教育(メカニカル発想法¹⁾)のコンセプトは、**図 1**のように問題や課題に関連したキーワード(着眼コンセプト)を挙げ、それをさまざまな視点で転換することで数多くの着想を生み出すものである。転換には、増速、縮減、複数化、破壊、逆転、消去などのいくつかの手法があり、連想ゲーム式にキーワードと転換プロセスを組み合わせることで着想数を増やしてゆくもので、着想の母数が多いほど、その中に優れた着想が含まれている確率が増加するとの考え方である。セレンディピティというよりはメカニカル発想法の言葉どおり、機械的に発想することになるが、学部の授業で実施した茶運び人形のからくりを模した現代版からくりコンテストでは、奇天烈な発想によるからくりを製作する学生もあった。いかほどかは不明であるが、そこにセレンディピティが作用していた可能性は十分にあると思っている。



転換プロセス	具体的な転換内容
増 長	増加, 増大, 拡大, 延長, 膨張, 高速化
縮 減	減少, 低減, 縮小, 短縮, 収縮, 定速化
複 数 化	一つしかないもの(こと)を複数化・細分化
破 壊	概念を破壊し, 別概念へ転換
逆 転	逆転, 入替, 交換, 回転
定義変換	定義の変換・変更
組 合 せ	転換プロセスを複数組み合わせる
消 去	概念自体を消去, 概念の除外

図 1 メカニカル発想法

3. 思ってもいない研究の展開

助教授になった頃、研究業績が目くらんで、共同研究の背景も目的もはっきりしないまま某企業との共同研究することになり、円筒トラバース研削における工作物の熱変形量の分布とその変化過程の解明に着手した。当時、塚本先生が円筒研削中の工作物表面の温度を、一对の熱電対線を短絡させずに離れたまま回転する工作物表面に接触させることで得られる熱起電力から測定する手法²⁾を考案されており、これを使えば円筒トラバース研削中の工作物表面温度が難なく測定できると気楽に考えていた。ところが、学生と一緒に実験すると、研削終了後、工作物の温度が室温に戻っても、熱電対線からの出力が同じ室温の研削前の工作物表面温度に相当する値に戻らず、零点数度程度のずれがあった。何度実験し直しても結果は同じで、思うようにならない結果に学生と頭を抱えてしまった。修士 2 年の研究期限も迫っており、暗礁に乗り上げかかっていた。ひとつ間違えば、研削前後で熱起電力のずれがなかったかのように無理矢理データ整理していたかもしれない。その時期に研究室の忘年会があり、塚本先生に思うようにならない研究の状況を話すと、「それは、研削によって工作物の表面の粗さが変わったのを熱電対線が検出してるんかもしれん。(岡山弁)」と、思わぬ言葉が返ってきた。これがセレンディピティの体験だと思っている。週が明けて、早速実験に取りかかり、**図 2**に示すように、円筒プランジ研削前後の熱起電力の違いが工作物の表面粗さの変化を示していることが確認できた。実験レベルではあるが、表面粗さを摩擦熱による温度上昇を基に評価するこれまでにない手法を開

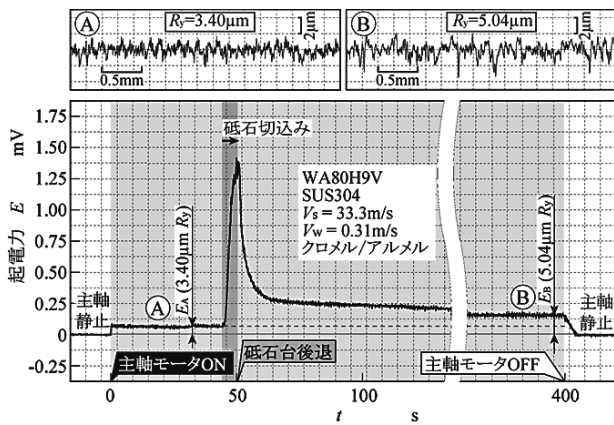


図2 円筒研削前後の工作物表面粗さによる熱起電力の変化³⁾

発したとともに、円筒研削面の粗さを研削直後に機上でわずか数秒の間に評価することができ、量産加工における表面粗さの全数検査の実現が期待された。その後、それまでのトラバース研削の研究はどこかに飛んで行ったまま研究に没頭した結果、砥粒加工学会賞熊谷賞をいただくことで、目的に達することのなかった共同研究が、別の花を咲かせてしまった。

4. 目に見えない世界のセレンディピティへの関わり

さて、セレンディピティの定義や体験例は、いくつかの書籍や本連載でも多く紹介されているが、その根源はどこにあるのか、セレンディピティは偶然なのか、偶然でないとするればその事象はどこからやってくるのか、さまざまな疑問が湧いてくる。セレンディピティの探求を試みた訳ではないが、縁あって目に見えない世界が発明と関係していることについての記事を目にすることがあったので、ここで紹介したいと思う。

まず、発明王 エジソンについてである。ご存じのとおり、エジソンは 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて白熱電球や蓄音機、映写機など、人類の豊かな生活につながった数多くの発明を世に送り出した偉人である。この発明品の幾つかを展示した某玩具メーカーの博物館が栃木県にある。その紹介の中に、晩年のエジソンが、人の他界後も残り続ける魂の話を聞く「霊界通信機(スピリットフォン)」を真面目に研究していたことが説明されている⁴⁾。この通信機は結局発明に至らなかったが、エジソンがなぜこのような発明を目指したのか不思議に思っていた。そんなとき、スピリチュアリズムを科学的に研究する学術領域があり、その中でエジソンが取り上げられていることを知った。我が国のスピリチュアリズム研究の第一人者である浅野和二郎氏の著書⁵⁾によれば、エジソンは父祖三代にわたるスピリチュアリズムで、父祖が蒔いた種子により偉大な発明の大部分はことごとくスピリチュアルな閃きの産物として、少なくとも有力なヒントをそこから得ていたとの記述がある。また、気の利いた発明は決して頭脳の計算からは生まれることはなく、頭脳を休ませて体を目に見えない世界からの意思に任せるときに初めて生まれるものであるが、日本では、そんなことを知らず知識教育に偏っていると評している。また、超心理学の実用的価値に最も要領を得ている北米は、スピリチュアルな世界からの受売りによって金儲けし、日本は北米の受売りによ

てたけなしの財布をはたいている⁵⁾と、我が国の状況を憂えてもいる。

浅野氏に先立って、英国の作家であった J.S.M.ワード(J.S.M. Ward)氏は、亡くなった自身の叔父との交信によって、目に見えない世界と現界との関係を知られ、インスピレーションの本源の存在と、芸術も含めた天才の作品は、その人物のスピリチュアルな能力を活用して受けるインスピレーションが操縦する結果であると説明している⁶⁾。その中で、機械類の発明なども概して同様で、人間の方が受け持つものはほんの一小部分で、いわば得られた閃きを地上生活に上手く応用するだけの工夫に過ぎないことも述べている⁶⁾。また、発明のインスピレーションを送る側からみれば、現界の人間の頭脳は鈍く、いかに卓絶した良い思想を送っても、一番肝要な部分が人間の頭脳にさっぱり浸透しなかったり、またとんでもない勘違いをされることのあるとの憂いも伝えられたと述べている⁶⁾。

さらに、我が国でも、大谷司完氏が上記と同様な目に見えない世界の見聞録を記しており、昭和 5 年 3 月 4 日には、その後しばらくして現世で発明、開発されたヘリコプタのような機械をはじめとする装置がすでにできあがっていたことが記録されている⁷⁾。ヘリコプタの実用化は、ナチス・ドイツ時代の 1936 年(昭和 11 年)であった⁸⁾ことを鑑みると、非常に興味深い内容である。

5. おわりに

誰にでも同等のセレンディピティが備わっていたり、セレンディピティを体験するわけではないことは言うまでもないが、前述のようにセレンディピティが目に見えない世界からのインスピレーションに関係するものとするれば、それぞれの与えられた宿命の範囲内で、最大限にセレンディピティを高めることは可能であり、そうあるべく務めることが肝要であると思う。それには、まず優れたインスピレーションを素直に受け取るための人間の受信機の感度を上げること、すなわち精神の向上が重要と思われるが、さて、ではどうすれば精神の向上が実現できるのか、自身の課題としても継続して追求してゆきたい。

6. 参考文献

- 塚本真也:創造力育成の方法, 森北出版, 東京(2003)
- 中島利勝, 塚本真也, 吉川満雄:水溶性研削油剤の作用に関する研究(第3報)一界面活性剤の冷却性および潤滑性と研削結果一, 精密工学会誌, **54**, 2 (1988) 414.
- 大橋一仁, 永田 龍, 塚本真也, 長谷川裕之:熱電効果を利用した円筒研削面粗さの高速オンマシン測定法, 砥粒加工学会誌, **52**, 12(2008)724.
- <https://www.bandai-museum.jp/cms/pickup/edison/20160525.html>
- 浅野和二郎:心霊講座(本文復刻版), 潮文社(1999)
- 宮沢虎雄:死後の真相, (財)日本心霊科学協会(1976)197.
- 大谷司完:天使の声, ことしる舎本部(1974)
- [https://ja.wikipedia.org/wiki/Fw_61_\(航空機\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/Fw_61_(航空機))



【大橋 一仁】(おおはし・かずひと)
 ・岡山大学 学術研究院環境生命自然科学学域
 ・e-mail : k-ohashi@okayama-u.ac.jp